

VI 文字式速記法の発展

1. はじめに

欧米から受け入れた符号速記が定着、発展する時代、初学者にわかりやすく、使いやすい速記理論を求めて、図 2-99 のような墨書、仮名の続け書きや、片仮名の続け書きの筆記をベースに、毛筆と和紙、鉛筆と洋紙を用いて横書きや縦書きで経験した日本語的な文字書きの特性を組み入れた速記法の立案が試みられてきた。

日常の日本語で用いられる文字の一部分を速記符号の一種として採用する、文字式速記法の研究は早くから取り組まれてきた。早期の速記研究者は、国会での逐語速記の使用には耐えないと見て、文字式を後回しにしたが、早くから国学者の林甕臣が日本語の発声機構を模写した速記符号の試みをしたり、カナ文字論者、さらにはローマ字運動の中からも文字改革を目的として速記研究に取り組む動きが見られた。その中で、片仮名や平仮名を表音記号として用いる方法は、欧米の幾何符号派に比べて日本人には学びやすく使いやすいがあり、カナ速記が先導役となって、太平洋戦争後に速記需要が拡大したころ大いに発展した。

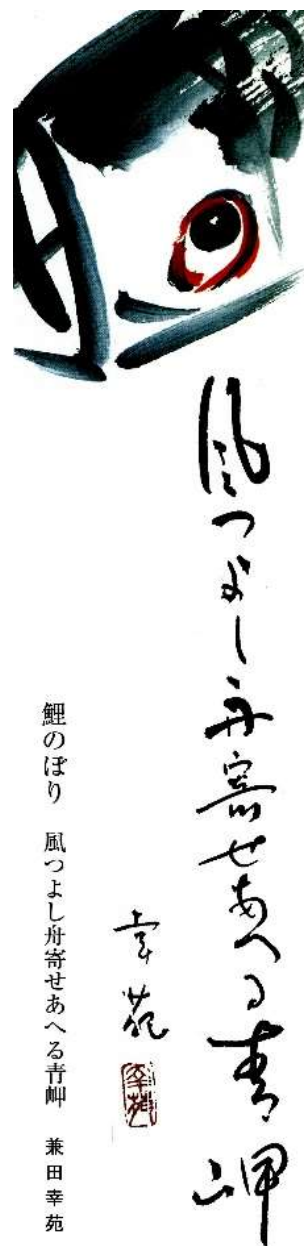


図2-99 毛筆で書いた俳画

「俳画 四季の気韻」p50

2. 日下部忠次の「写言術」

音声で発せられた言葉を文字で書きとめる活動において、天武天皇の勅命を受けて稗田阿礼が暗誦し、太安萬侶が筆記して古事記が編纂された故事をもって日本における速記行為の始まりであると、武部良明は「日本速記方式発達史」に書いた。しかし、この方法は文字を用いる通常の筆記行為であって、早書きの工夫などが行われていないので、速記ではないとする見方がある。

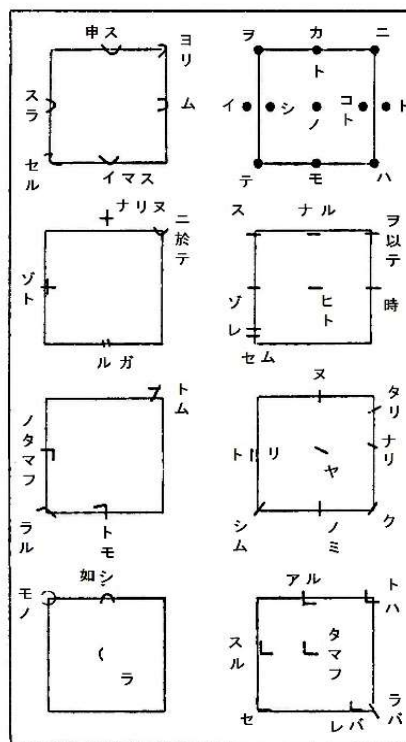
また、ヲコト点(図 2-100)の発想をもって速記の起源とする武部の説もその技術、方法から見て、ヲコト点は漢語を日本語に読み下すためのものであり、音声固定を特徴とする速記の概念には含まれないと下谷政弘は見るとする。

そもそも紀元前、古代ギリシャにおいて存在した速記は、略語主義をとり今日の表音主義の速記と異なる点や、文字に機能性を求める点において速記の前駆的形態であるとする認識が有力である。また、古代ローマにおけるティロの速記は、文字を用いて言葉を略す書法としてタキグラフィ Tachygraphy と呼ばれ、手書き符号速記に至る前段階の文字による略記法であるとするのが通説である。

日本語の速記方式は、国会開設年が確定して無から急いで実用化を図る必要があり、民間が英語の符号方式を日本語へ適応させる方法がとられた。したがって、田鎖綱紀、黒岩大らに日本の文字を用いて組み立てる選択は最初から視野になかったが、速記という機能性文字の概念が見えてくると、身近な文字を用いて符号速記に準じた体系を目指す動きが出てくる。

そうした文字式速記法をさかのぼると、早期に林甕臣の試みのあと、1910年2月25日、日下部忠次が「写言術」を出版し、図 2-101 の基礎符号に片仮名起源の符号を用いて田鎖式のように筆記する手法とした。⁴⁹

日下部の動機は「欧米語と日本語と根本的に異なる言語を写すに、同じ符号を用いて完全に速記せんとするも、あに得べきの理あらんや」という疑問から発するものであった。つまり、操作しやすい高速度速記法がまだ完成しないのは、「これ、本邦言語を欧州



平安初期のヲコト点『成実論』第一群点
出典：国語学研究事典 訓点 村上雅孝

図 2-100 ヲコト点

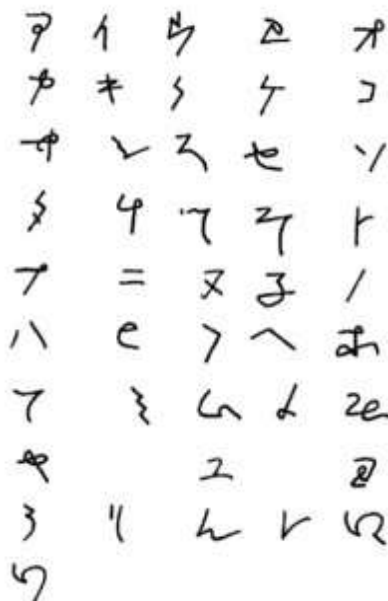


図 2-101 日下部式の基礎符号
「写言術」 1910 日下部忠次

各国の言語と同一視し、適当せざる符号をもって記せんとするがゆえに、正法を求むを得ざるなり」というわけである。(武部,「日本速記方式発達史」)

日下部が見た文字式の利点は(1)日本語を完全に筆記できる, (2)翻訳を要せず, (3)身心を痛めず, (4)筆記原書は何人でも読み得, (5)片仮名をわきまえる者は何人にしても修得し得る——とあり, 文字改革を意識するものであった。

ただ, 片仮名には似た文字が 28 音あり, 速く書くと判別しかねるかもしれないと考えた。日下部は, [シ](shi)は[ン]/N/, [ヲ]/wo/は[ラ]/ra/と, [レ]/re/は[シ]/shi/と, [ン]/N/は[レ]/re/と, [コ]/ko/は[ユ]/yu/と, [エ]/e/は[ユ]/yu/と, また[エ]/e/は[コ]/ko/と, [ア]/a/は[カ]/ka/と, [マ]/ma/は[ヤ]/ya/と, [ニ]/ni/は[ユ]/yu/と, [マ]/ma/は[ア]/a/と, [カ]/ka/は[ヤ]/ya/と, [コ]/ko/は[マ]/ma/と, [ロ]/ro/は[ル]/ru/とそれぞれ紛らわしいとした。

といっても, 日下部の関心は基礎音の字体に研究に限られ, 高速度化を図るための速記理論には及ばなかったため, 実用的な用法には至らなかったと武部は言う。そこでは表音技術と速書への対応面や, 連続するための運筆法への配慮などが欠如していたとされる。

1922 年には桜井郷三の片仮名を用いる「最新応用速記術」があった。1929 年には菅原長太郎が「速記術応用学生筆記法」を著し, 片仮名を用いて普通の文字の 2, 3 倍の速度で書ける筆記法として流行したと日本速記年表に書かれている。

ちなみに, 中根式速記法では創案者, 中根正親が五十音符号を説明するために, 図 2-102 のように片仮名の画の一部を取り出して説明していた。歴史的には, 片仮名が速く書けることを理由にカナ速記に着目され, 中根式を学んだ岩村学が岩村式カナ速記法を創案し, 太平洋戦争後の高度成長期にカナ速記ブームを巻き起こした。続いて 1958 年中根正雄は片仮名と平仮名を巧みに用いて筆記する即席速記法を創案した。後継者, 中根康雄は 1984 年「スピードメモ法」を出版し, その普及活動を続けているが, 仮名書きでは平仮名縦書きの方が片仮名横書きよりも速く書けると指摘する。



図 2-102 中根正親の仮名からの符号説明図

2. 岩村式カナ速記法

		アイウエオ	カキクケコ	サシスセソ
1	岩村式初版 1930 岩村学 日本速記方式発達史 P118	アイウエオ	カキクケコ	サシスセソ
2	岩村式実用速記学会 1943年版	アイウー〇	カキクノ	サノスーソ
3	岩村式実用基本文字 速記学会 1949年版 単化文字	アイウー〇	カキクノ	サノスーソ
		アイウー〇	カキクノ	サノスーソ
4	立川速記者養成所版 基本文字のつくり方 1955年版 基本文字	アイウエオ	カキクケコ	サシスセソ
		アイウー〇	カキクノ	サノスーソ

	タチツテト	ナニヌネノ	ハヒフヘホ
1	タチツテト	ナニヌネノ	ハヒフヘホ
2	タチツテト	ナニヌネノ	ハヒフヘホ
3	タチツテト	ナニヌネノ	ハヒフヘホ
	タチツテト	ナニヌネノ	ハヒフヘホ
4	タチツテト	ナニヌネノ	ハヒフヘホ
	タチツテト	ナニヌネノ	ハヒフヘホ

	マミムメモ	ヤユヨ	ラリルレロ	ワ
1	マミムメモ	ヤユヨ	ラリルレロ	ワ
2	マミムメモ	ヤユヨ	ラリルレロ	ワ
3	マミムメモ	ヤユヨ	ラリルレロ	ワ
	マミムメモ	ヤユヨ	ラリルレロ	ワ
4	マミムメモ	ヤユヨ	ラリルレロ	ワ
	マミムメモ	ヤユヨ	ラリルレロ	ワ

図2-103 岩村式カナ速記の変遷 (1)
(主流版を中心に比較)

中根式京都速記学校で中根正親, 正雄に符号式の中根式の指導を受けた, 岩村学は, 符号理論をもとに, 1930 年岩村式を創案した。開校間もないころの写真(図 2-104) 前列右から 2 人目に岩村が写っており, このころ岩村は中根式速記を学んでいたことがわかる。図 2-103 は岩村式カナ速記の初版から最終版の符号の変遷である。岩村は師を正親と言い, 一方正雄はみずから中根式速記を指導したと, 発言が異なる。記念写真で前列左から 2 人目が正親, 左端が正雄で, 下部の白抜き文字に氏名が中根式で書かれている。



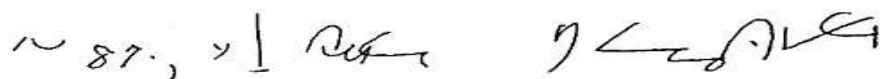
タカト・ショウゾウ ヤマト・ノボル ウノ・キツロウ アイカ・トシ ナガタ・タダオ ハナワ・マサズ タカ・ワタル
 コイケ・ツヤコ キタガワ・ノブコ シマタ・ミキオ オカサハラ・ワカ 中根式京都速記学校
 ナカネ・マサヨ ナカネ・マサチカ ナカシマ・ハンキョウ イムラ・サトル ミムラ・ノブ

図 2-104 中根式京都速記学校の記念写真

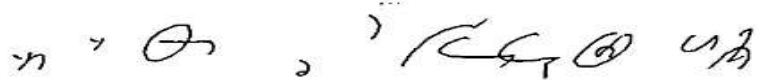
京都出身の貴族院速記者, 安田勝藏によれば, 「岩村は, 中根式発明当時の門弟であって, 中根式速記法を初めて実用に供し, 大本教事件当時京都府特高課に専門速記者として入り, 大いに活躍した人であるが, 氏は夙に熱心なカナ文字会員であり, 何とかして純国字たるカナ文字を以て速記は出来ないものであろうかと, 種々研究の結果, 遂に昭和 5 年(1930)岩村式カナ早書法として発行し, 爾来, 京都を中心としてカナ文字会と連絡をとりつつ各地に講演講習会を開き, 短期成功をモットーとして居るので, 非常な勢で広まりつつある」(「日本速記五十年史」1934, 65p) とする。岩村の著書には 1943 年の岩村式実用速記学会版(岩村学筆)や, 1949 年の岩村式カナ速記法決定版(岩村学述), 岩村式カナ速記法通信講座な

どがある。

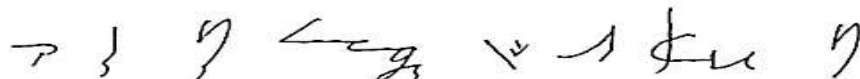
カナモジカイ傘下では、岩村式に続いて松阪忠則や深堀義輝らが、学びやすさを追求するカナ速記を盛んに研究していく。岩村が学んだ京都には、折衷派では熊崎式から派生した牧式(大阪)、米田式の拠点がある中で、中根兄弟のほか森卓明、古久保峯吉(国字常弘のちに寿光)らによる最新の単画理論研究が盛んに行われる環境にあった。単画式、純単画式、カナ速記は刺激し合って、開花していった。岩村式の晩期を担ったのは、立川市の関根雪峰らであった。(図2-105に文例)



大体87年ごろ、その時に書かされたもので、「リサイクル経済を考える」というものと、



それからその同じころに、これは国、ジャパンセンターのものだと思いますが、佐野君が



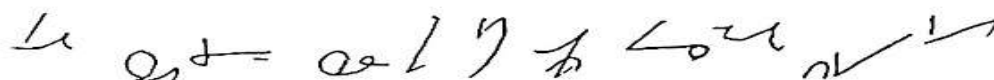
まだ居たころ、リサイクルの経済性を巡っての議論をしていたときのものとして、「リサイクル



事業の経済性を巡る環境について」というのと、それから最近の形ですが、



廃棄物学会ができました時の、第1回のシンポジウムの際のペーパーと、それからそれを



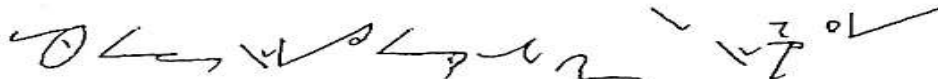
もとにして学会誌の方に、学会誌も一番リサイクル資源化・経済学的視点からという特集の



中で、「リサイクルの採算性を巡る諸問題」という形を書かせていただいたものです。



ここで、私自身がずうっと言わんとしていたのは何かと言いますと、実は日本の中における



経済性の議論というのは、経済学的視点から言いますと、ちょっと議論的に限界と言う

〔産業廃棄物リサイクルシステムについて〕

図 2-105 関根雪峰による岩村式カナ速記の文例

岩村は、カナ速記の特徴点を(1)カナ原形を変ることなく一筆化すれば倍以上の筆記能力を発揮し、普通の講演はほとんど速記できる、(2)綴字法、(3)縮字法、(4)略記法などを合理的に採用し、従来の符号方式に比して遜色のない程度で速記符号群を仕上げることに成功したことを挙げる。

1943年版の岩村による速記法理論の体系は(1)基本文字44音節、(2)濁音20音節・半濁音5音節、(3)鼻音(撥音、例:/アン/)、(4)長音符(例:/クー/)、(5)拗音として拗短音21、拗長音21、濁拗短音9、濁拗長音9、(6)促音表記法(交差、例:筆記)、(7)踊字(疊音)筆記法(字末に加点等、例:[ハハ],[さまざま])、(8)綴字法(例:[カイ],[イエ])、(9)縮字法(例:[イス],[コナ],[トリ])、(10)助詞([ヲ],[デ],[ト],[ニ],[ノ],[ハ],[へ],[モ],[デハ],[ニハ],[デモ],[ニテ])、

(11)略字:①特定略字:19種、例:[或],[於],[考],[けれども],[私]、②下段略字(ラ行省略文字、口語略字)、③二段略字(例:(a)[ある],[いる],[する]等、(b)[ごさい],[ます],[ません]等、(c)[ありさま],[あらゆる],[いまさら],[我が国]等)、(12)重要特定略字 60+60、(13)複音漢字の省略一などで構成した。ほかにも、上段小文字(例:/アイ/、/カイ/、/サイ/など32)、下段小文字(例:/アク/、/カク/、/サク/等16)、中段小文字(例:/カツ/、/サツ/、/タツ/、/トツ/、/シチ/・/シツ/5)、各段の活用(例:/アン/、/カン/、/サン/等6)、拗音の略体文字(例:/キュー/、/キョー/、/チュー/、/チョー/など)、疊字法の活用(例:[ササキ],[ココロミ]等)など、実務上で得た改良を加えた。

さらに、各種高等略法として疊字標の応用、漢語の熟語、和語の熟語、ナカッタの略法、数字の扱い方、ラ行省略、加点法、交叉法、敬語、受け身の変化など、個別の用例の対処法を細かに解説していた。

こうして岩村八重子編集の1949年版において「基本文字の単化」を加えて、基礎音節の[ア],[カ],[サ],[ス],[ツ],[ト],[ネ],[ハ],[ホ],[ヤ],[ユ],[ワ]を単画化もしくは画数削減を図る基礎符号の省画化が認められる。その目標は符号式速記法に伍する高速

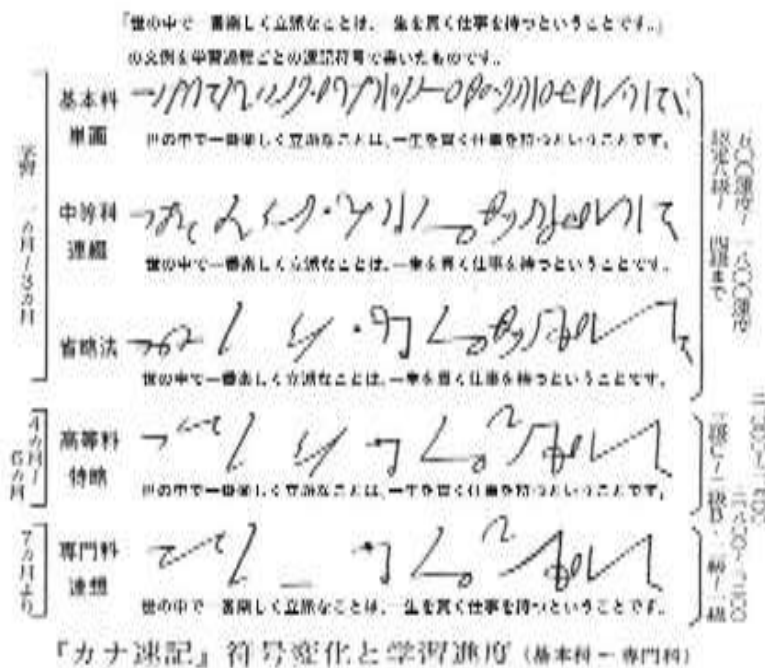


図 2-106 岩村式カナ速記における段階順で変化する速記符号

度型カナ速記法に置かれていた。

継承者、関根雪峰が用いた資料(図 2-105, 106)からは、岩村式はカナから導入し符号へ段階的に高度化する教育法で最終的に高速度符号速記法へ誘導する体系であったことがわかる。岩村式は直接、間接を含めて、その後のカナ速記に大きな影響を与えた。岩村式の教育拠点は、立川、赤平(北海道)、東京、名古屋、岐阜、四日市、京都、大阪、奈良、神戸、姫路、広島、松山、福岡に置かれ、関根は東京都立川市で長く岩村式を指導するとともに、議会速記などに従事した。関根は2017. 1. 12に死去し、岩村式の普及活動は終わりを告げた。

		アイウエオ	カキクケコ	サシスセソ	タチツテト
A	深堀式 1948	ゝノハ一〇	ノ一フノ	〇ノハ一	ノ一ノ一
B	相賀式 1931	アイウー〇	カキクノ	サシスセソ	タチツテト
C	木村式 1948	ゝノハ一ノ	ノ一フノ	〇ノハ一	ノ一ノ一
D	イトー式 カナ 1950 符号	アイウエオ	カキクケコ	サシスセソ	タチツテト

	ナニヌネノ	ハヒフヘホ	マミムメモ	ヤユヨ	ラリルレロ	ワ
A	ゝノハ一ノ	ノ一フノ	〇ノハ一	ノ一ノ一	ノ一ノ一	ノ一
B	ナニヌネノ	ハヒフヘホ	マミムメモ	ヤユヨ	ラリルレロ	ワ
C	ゝノハ一ノ	ノ一フノ	〇ノハ一	ノ一ノ一	ノ一ノ一	ノ一
D	ナニヌネノ	ハヒフヘホ	マミムメモ	ヤユヨ	ラリルレロ	ワ

図2-107 岩村式カナ速記の発展(2)(注)深堀式は中田知版による
深堀宇宙 赤穂速記学

4. イトー式速記法

愛知県の伊藤勝持は1931年に岩村式を修めたのち、毛利式の草書理論を導入してイトー式を1950年に創案した。片仮名カナ速記を組み立て、その後符号式の基礎符号へつなぐという岩村の考え方を踏襲するものであった。「和草」つまり日本型草書派の動きの一つである。

伊藤は基礎符号を①カナ文字から生成する、②音の頻出度に合わせる、③単画線をなめら

かに書く,④単画線に明瞭に特徴を持たせる——点を立案の根本方針とした。

日本語においてよく出現する音と,つながりやすい音の組み合わせ確率について求め,さらにそれらの確率から正しく,速く,流麗に筆記できる線条符号を設計するのが着眼点であった。2音節,3音節,4音節の言葉から手計算して,言葉の出現頻度や音節のつながりの確率を調べ出したという。

伊藤は「連続音調査,恐らく数百万語,3年ぐらいかけて,例えば/カ/という音は,最初に何回,2音目には,/ア/の次の/カ/,/イ/の次の/カ/,/ウ/の次の/カ/,/エ/の次の/カ/,/オ/の次の/カ/は何回あるかというふうに,そして3音目,4音目以下も同様に,すべての音について同じように調べ,よく続いて使われる音と音は続けやすい線にするためのキソとしました」と振り返る。人工知能研究分野の自動音声認識技術 Automatic Speech Recognition では統計的確率法を用いて言葉の音列のつながりを決定しているが,近年のAIブームの恩恵を受けて音声認識による速記においてもビッグデータ処理,深層学習手法によって音のつながりの予測精度が驚異的に高まっている。伊藤は“人力”という方法をとったが,人智の限界から期待どおりの成果につながらなかった。そうして完成されたのが図 2-107D の基礎符号であった。

イトー式の速記理論を見ると,①濁音は濃線化,加點法によらず頭部にサイン符号をつけて表す,②助詞には一音助詞 19,複音助詞 ([カラ],[クライ],[マデ]等) 20 を定めるほか,位置によって複合助詞を表すことにした,③アオスナ記号として,[アル],[オル],[スル],[ナル]の4語に特別な符号を与えて,連続する言葉を簡単に書く,④過現未法と呼ぶ語尾変化させる[アリマス],[ゴザイマス],[イマス],[イイマス],[イキマス],[ユキマス],[オリマス],[キマス],[キキマス],[出マス],[ナリマス],[ミマス],[ヨリマス]等の[マス]の符号にサイン記号をつけて語尾変化に対応させる,⑤コソアド言葉を対象に[コー],[コーイウ],[コンナ],[コレ],[コイツ],[コッチ],[ココニオイテ]などの変化に対応させる,⑥加點法を用いて,[デアアル],[デアリマス],[ゴザイマス],[モイマス]等に対応する略記法とする,⑦数詞の速記符号体系を用意する,⑧20ミリ文字として[イタノデアリマス],[アルトオモウノデアリマス]等,述語部分を簡単に書ける速記符号を用いる,⑨第二ヨー音として/ウヰ/,/ウヱ/,/ンヱ/,/ティ/,/テュ/等28音の拗音符号を設けた。

伊藤の問題意識には「日本の速記は,この75年間に非常な進歩を遂げたが,それは『専門家用』としての進歩であって,『一般向き』という面においてはむしろ後退している状況であり,一般向きで,しかも高速度の速記が可能な方式こそ,そういう方式が現れてこそ,はじめて『万人が速記のできる時代』を望むことができるわけである」という考えがあった。

伊藤は初め,伊藤式,イトウ式と称したが,のちに「イトー式」と名乗っており,本稿では最終方式名をとった。速記理論の構成は,基礎音の符号,縮記法,略記法などで構成している,基本的には岩村式の理論体系にならっている。理論は実用編と専門編の2編で構成し,基本文字では(1)カナから自然発生的にただ一つの法則によって生まれる文字を使

う、(2)音の頻度に合致させる、(3)画線をなめらかに書く、(4)画線にはっきり特徴を持たせるという立案の方針を具現するために制定した。また、オ列符号には頭部にサイン記号をつけ、離筆の不利を跳ね返して、連続時のくずれと判別性を強化した。

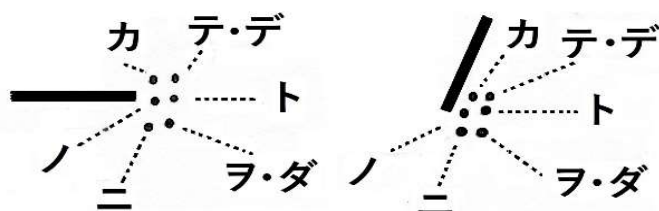


図 2-108 イトー式の(加点)助詞法 伊藤勝持

省略法上では、濁音は加点法(図 2-108)をとり、助詞では一音助詞 (19) , 複音助詞 (20) のほか、位置利用による複合助詞 (20) を設けた。またアオスナ記号には特別符号を与えて変化に対応する体系を整えた。[マス]には5角度と助詞によって変化に対応させ、[シル]、[トル]、[ミル]、[ヤル]、[ヨル]等9語にも過去現在未来法への対応を整えた。[コノ][ソノ][アノ][ドノ]のコソアド言葉にも上中下段に書き分けることによって省画化を図った。同音語の差異化のために加点法を用いるほか、数詞法の制定、符号の長さ種類を4種とする決まり、正確な表音のため28拗音を制定した。

伊藤は「コトバは生きているものである。たえず進化し——少なくとも変化しているものである。10年前の書き方がいかにスグレタ方式であったとしても、そのままでは時代おくれの役に立たない存在になるわけであるから、常にクフウして改善することは何人にも必要なことである」と言語環境の変化への対応を挙げ、いわゆる速記符号における規範性については限定されるべきとの考えを持っていた。

5. 相賀式速記術独習書, 高速日本実用速記学

1931年10月1日、岩村式を学んだ、相賀庚(1910. 4-不詳)は相賀式カナ速記(図 2-107 B, 図 2-109)を創案した。1942年、相賀は岡山市に岡山速記塾を開設して、岩村式カナ速記を改良した相賀式の指導を始めた。1948年同門の木村嘉男(1926. 9-不詳)が木村式(図 2-107 C, 図 2-109)を発表して倉敷市に富士速記塾を開設し、また高鳥富士夫(1929. 12-不詳)が岡山市に速記塾を開いて富士式の普及活動をそれぞれ始めていた。1950年には木村、高鳥による「高速日本実用速記学術速記講座」が著された。これら3式の詳細な関係の解明が残されている。

相賀式を採用した岡山大学速記研究会は1958年に発足し、1966年1月20日には学友会傘下の速記部へ昇格した。方式は当初相賀式が指導されたが、講師が木村嘉男に代わって方式名を木村式へ変えたのち「岡大式速記」と呼び名を変更し、1980年には速記教本を発行した。

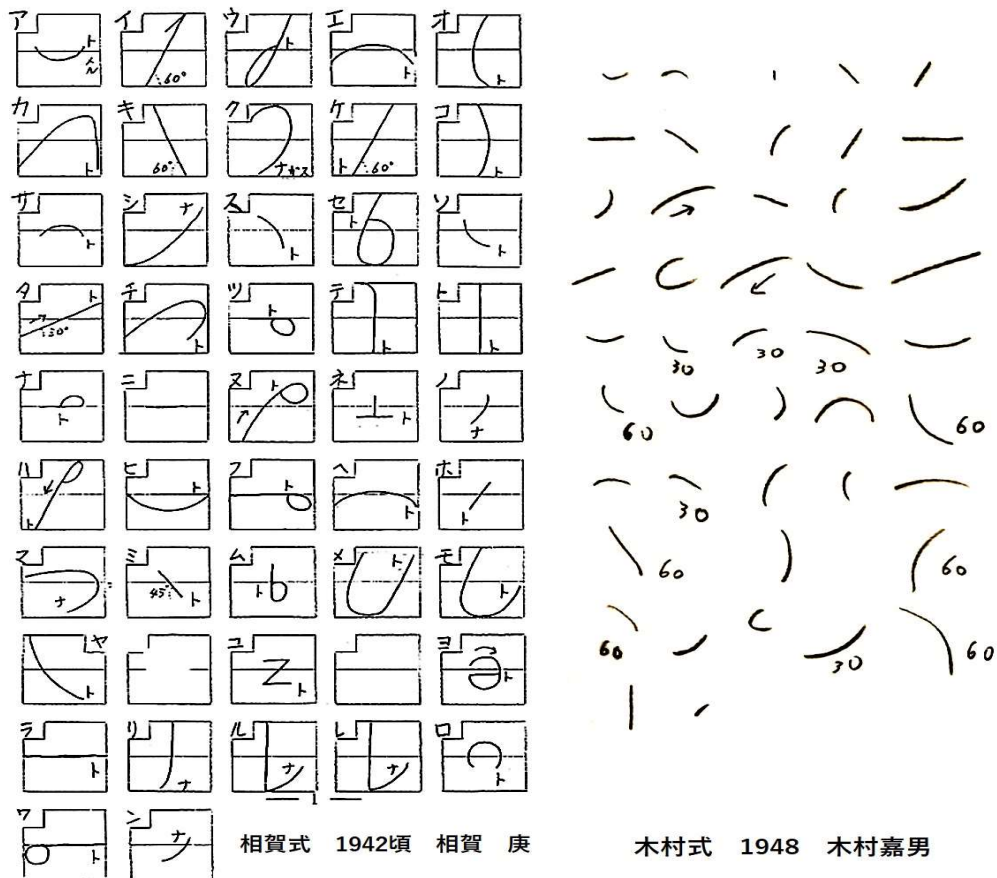


図 2-109 岡山大学速記研究会におけるカナ方式の相賀式と木村式

また、並行して早稲田式とV式を採用し、自主運営している点が特徴である。「岡大式速記」と題された相賀式教本の「初めに当たって」には、次のように書かれている。

「我が岡大式は相賀庚氏によって1931年10月1日に従来の符号式速記を脱皮し、文字式を創始されたのを受け継ぎ、さらに改良に改良を重ね、今日に至っている。文字式速記としては現在日本では唯一のものであり、我が部では1958年に発足し、1966年1月20日学友会速記部となり、大学における文化活動の一端を担っている」

ただし、唯一の文字式速記ではなかった。

また、1971年、岡山理科大学においても速記研究会が発足し、木村が木村式を指導した。木村は1968年1月24日、木村式速記発表20周年記念会を岡山市立公民館で開いており、岡山県下でカナ3方式（相賀庚、木村嘉男、高鳥富士男）が協調関係を持って活動した時期があった。^{#10}

6. 深堀式カナ宇宙方式

岩村式カナ速記研究会は1948年に通信教育を始めており、中田知は初め岩村の指導を受けたが、深堀義輝から引き続き指導を受けていた。カナ速記においても、高速化を目指す研究が行われるようになると、岩村と深堀の考え方に違いが生じてきたため、深堀は1950年に基礎符号を単画化（単化）や、逆記法など高速型の理論を考え出すに及んで、岩村式から離れて深堀式と名乗ることになった。（図2-107A）

深堀式成立時の経緯について、中田は「深堀先生が基本文字を7字ずつ単画化されて21文字にふえるころになると岩村学先生と意見が対立し、1948年12月、深堀先生が撥音省略法を発表されるに及んで深堀式として生徒40人前後で独立されたようだ。これより位置利用の取り組みを開始、撥音方法の書き方の変更による反訳の混乱を生じながら20数年の年月を経て今日に至っている。」と回顧している。

深堀から岩村式を通信教育で学んだ、中田が兵庫県赤穂市議会の速記者として活動しながら深堀式への転換を図り、「深堀式カナ速記宇宙方式」へ発展させ

た。中田が深堀式の基礎符号と理論体系を堅持し、実務上の経験をもとに行った改良点は(1)同じ形の符号を4通りに読む、(2)撥音省略法を用意した、(3)逆記法と前音の位置を利用して後音を省略するなど、離筆に意味を持たせる分かち書きなどを特徴とする。

その理論構成を見ると、(1)縮字法において字音語の尾音を上中下3段の位置を利用して頭音符号を2分の1の大きさに縮小する。上段には、例えば/アイ/、/カイ/、/イキ/、/エキ/など、中段には/アッ/、/シャッ/など、下段には/アク/、/イク/、/ウク/などに適用する、(2)続記として、疊音からヒントを得て2音目に/イ/、/キ/、/チ/、/ナ/、/ニ/、/マ/、/モ/、/ワ/、/エ/が来る場合の縮記法を用意した、(3)促音をあらわす交差法を/キ/や3音目以下に/リ/が来る場合に应用する、(4)並記（平行）綴字を応用して左右、上下に符号を置いて言葉の単群とする、(5)前符号の脚部から後符号を書き出すことにより後続符号長を2分の1に短縮化する、(6)長音筆記法を拡張して逆記する略字を設定する、(7)撥音を伴う言葉において、タ行音節は角度30度で前音の2分の1に短縮、ナ行は同角度、同長さ、ラ行は同角度、1.5倍長とする——など、さらに詳細に設定した点を改良の骨子であるとする。（文例は図2-110）

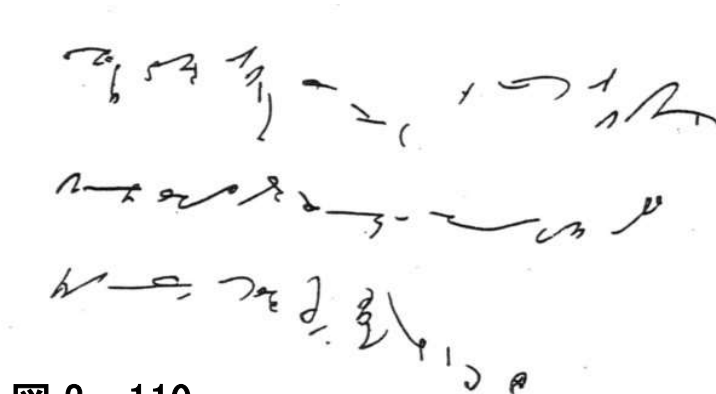


図2-110

深堀カナ宇宙式の文例 中田 知

文：ロンドンは緯度が52度で北カラフトあたりに相当するそうです。だから日本人の私たちから考えると、寒冷地で冬じゅうを雪で埋もれているように想像されますが、実際は暖流の影響によって真冬でも東京より暖かく過ごしやすいところでございます。

		アイウエオ	カキクケコ	サシスセソ
A	カナモジカイ式			
B	寺谷式 1949			
C	三村式 1963 注: *大文字 #小文字			
D	植岡式 1964			

	タチツテト	ナニヌネノ	ハヒフヘホ
A			
B			
C			
D			

	マミムメモ	ヤユヨ	ラリルレロ	ワ
A				
B				
C				
D				

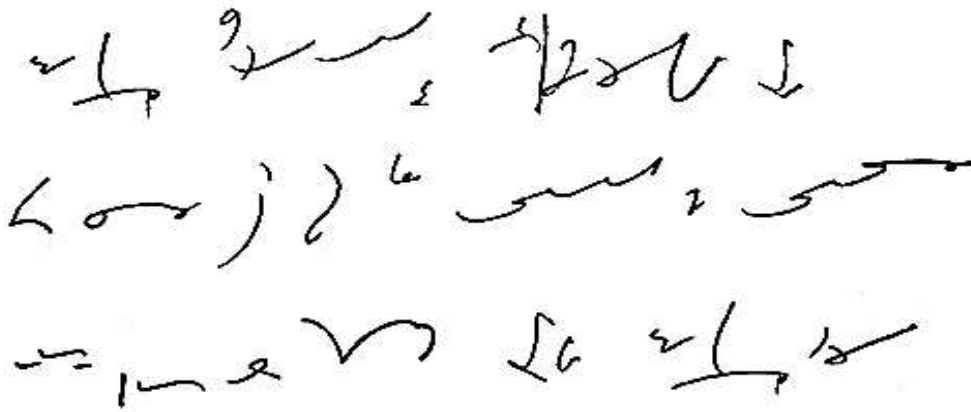
図2-111 岩村式カナ速記の変遷 (3)

兼子次生作成

7. カナモジカイノ速記術

岩村はカナモジカイ会員として片仮名から符号式速記へ導入するアイデアを実現したが、カナモジカイ理事長を務めることになる松阪忠則による「カナモジカイノ速記術」（基礎符号は図 2-111(3)A)が 1946 年に登場した。速記の価値が高くて社会的に優遇された時代に、難しい符号速記を避けて、学びやすい手書き速記を普及させようと、1950 年ごろには岩村の成功モデルを見た後発組が続いて文字式の創案ブームを呈した。

文字改革運動の中で、カナモジカイは松阪がシロトリ・キミオ、キノシタ・ユウイチローの協力を得て、速記教育へ進出した。片仮名文字の普及を訴え、文部省国語審議会委員を務める松阪が取り組んだ事業であった。図 2-112 の文例は北九州市議会の速記を行っていた田中佐智子のもので、地方議会の速記録を作成する者が多かった。



宮沢総理大臣は臨時国会の開会に当たって自由民主党の両院議員総会で挨拶し、(一行目)
景気対策や国際貢献、それに政治改革などの政治課題に(二行目)
全力で取り組む考えを強調しました。挨拶の中で宮沢総理大臣は参議院(三行目)

図 2-112 カナモジカイ式の文例 田中佐智子

一方、文字改革運動の中から、手書き速記と並んで機械速記への挑戦は、ローマ字運動家が進出を図っていた。第一次世界大戦のパリ講和会議に出席した日本政府団の中で、田中館愛橘が英文タイプライターを携えて随行し、ローマ字つづりで議事録を作成したことがあり、会議後、田中館はフランス製機械速記グランジャンをローマ字会へ持ち帰った。のちに、シカゴ万博を訪問した緒方富雄がアメリカ製の機械速記を持ち帰り、事務局を預かる佐伯功介が日本語機械速記法の研究を呼びかけて、名乗りを上げた川上晃が 1944 年日本語速記機械の特許を得たのが、裁判所における「ソクタイプ」（緒方が命名者）であった。ソクタイプでは日本語をローマ字で表音的に打ち、英文タイプで清書する発想であったが、のち

にコンピューターを利用した日本語処理システムを開発し、漢字仮名交じりに変換して裁判速記録を調製しようとする構想へ発展した。ほかにも英文タイプ、カナタイプを用いて速記しようという発想が牧泰之輔らによって試みられた。

カナ速記推進者の「一般文字と関係のない記号を使うことは習得を困難にする」という意見から、松阪は講述した「新速記術講義録」(一)の中で、「本速記術ワ容易ニ習得ノデキルコトガー大特色ニナッテオリマスケレドモ、ソレワ、数年間ヲ要スル在来ノ速記術トノ比較ノ話デアリマス。ワズカ3ヶ月デ熟達スルコトワ、ムシロ非常ナ努力ヲ要スルモノト御承知クダサイ。ソシテヒマサエアツタラ、目ニフレ、耳ニスルコトバヤ指先キデ書取リスルコトデス。」と書いている。

衆議院、参議院の速記者養成所において2年間で訓練する符号速記に対して、カナ速記はたった3カ月、150時間で高速度対応の技能を身につけられるとする宣伝文は速記学習者を引きつけた。

日本語の文字の合理化を図ることが、カナモジカイへ奉職する理由であった松阪は、科学の立場から国語、国字との関わりからカナ文字の研究を続けた。その過程で、片仮名の反射能力を利用して、最も簡単に覚えやすく、早く書ける方法を模索した。そして1942年から創案を実験教育に移して修正の上、まとめた体系をカナモジカイの文化事業の一つとして1946年9月23日公表した。

松阪の速記体系は、清音、濁音、半濁音、促音、撥音、拗音、長音、疊音の基礎音節の書き方、助詞、一般省略法、終止符号、過去符号、マス符号、否定法、仮定符号、独立助詞法、未来符号、言葉の繰り返し、外来音のほか、セレ、テデ、ベキ、タラ・タリ、イタス、タイ、マイ、ナル、シイ、存在詞法、ト動詞法、テ動詞法、大文字動詞法、アゲカギ法、リどめ法、倍文字法、接尾語法、数字法、記号類などの説明と練習となっている。

8. 寺谷式版岩村式カナ速記

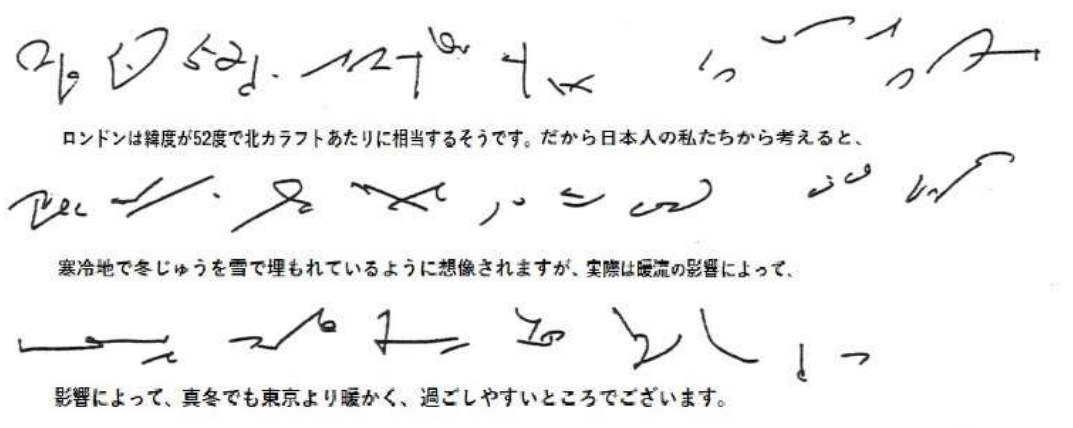


図 2-113 寺谷式の速記文例 (榊原守正)

岩村式カナ速記の通信教育で、1949年から1952年にかけて寺谷武の指導を受けた榊原守正は中日新聞社編集局速記部で電話速記に長年従事した。(基礎符号は図2-111(3)B)

電話速記は明治以来、新聞通信社で用いられた記事原稿の受信方法で、取材現場ないしは拠点間で送受稿する際、電話口で口述した原稿文を各地の印刷拠点でそれを内勤記者(速記者)が書き取り、普通文字に清書してデスクへ提出するものであった。1970年代に送受稿が機械化されて消え去った。図2-113は榊原守正による寺谷式の文例である。電話速記者は戦後、全国に速記市場を拡大し、民間方式が発展する職場であった。

9. 植岡式カナ速記法

戦後続々登場したカナ速記がほぼ落ち着き出したころ、愛媛県議会速記者の植岡健治郎は「植岡式国民速記法」を世に出した。植岡は1956年第84回速記技術検定奨励試験を岩村式で受験してB級に合格し、1958年の第128回速記技術検定奨励試験を其他方式で受験しA級に合格しており、この間に植岡式カナ速記法を立案した可能性がある。

植岡は、符号式の速記が複雑難解で2年、3年をかけないと習得できないことが課題であると、一方カナ速記は比較的簡単に習得できても速度が出ないのは、速記方式自体に最大の原因があると見た。その課題は、従来のカナ速書法は片仮名の一筆化にとどまり完全な速記文字化に成功していないと結論づけた。

出発点となる基礎符号では、漢字の最初、または最後の数画を充てた省画体と、字体を多少曲線化して草書化する方針をとったという。その場合、従来のカナ式に見られる片仮名の草書化、ないし一筆化等の無理な速記線を排除するとともに、単にカナ文字の画線の一部をとるような符号化を避け、さらに省画法においても統一性を持たせて記憶しやすくしたと主張する。(基礎符号は図2-111(3)D)

基礎符号の中で、(1)長音は横長直線が続ける、(2)鼻音は右上にはねる、(3)濁音はその音節符号の尾部や中央部に点を打つ、(4)促音は前後の符号を交差する一表記原則を定めた。速記理論の主要な略字と、省略法を用意し、暗記を必要としない実用的な方式としたと宣言している。

基礎符号を見ると、岩村式系統の配字をとり、カナ速記の普及を目指して植岡式国民速記普及協会を設けて通信教育に取り組んだ。

10. 標準式カナ速記法

太平洋戦争後、速記は依然として社会的価値が高く、独学が難しい符号式速記の改良を目指す研究が競われた。符号の改良は速記法理論が難解になる負の面を絶えず伴い、研究者は学習性の向上と高速化のバランスをとることに苦慮した。

衆議院において標準符号(単画)を完成した、西来路がカナ速記を考案したのは、当時最

高ベルにあった速記理論体系をカナ速記に移植しようという狙いであった。図 2-114, 115 は、衆議院式の標準符号（単画）と、カナの素音符号の比較で、「速記入門ハンドブック」に収められた。

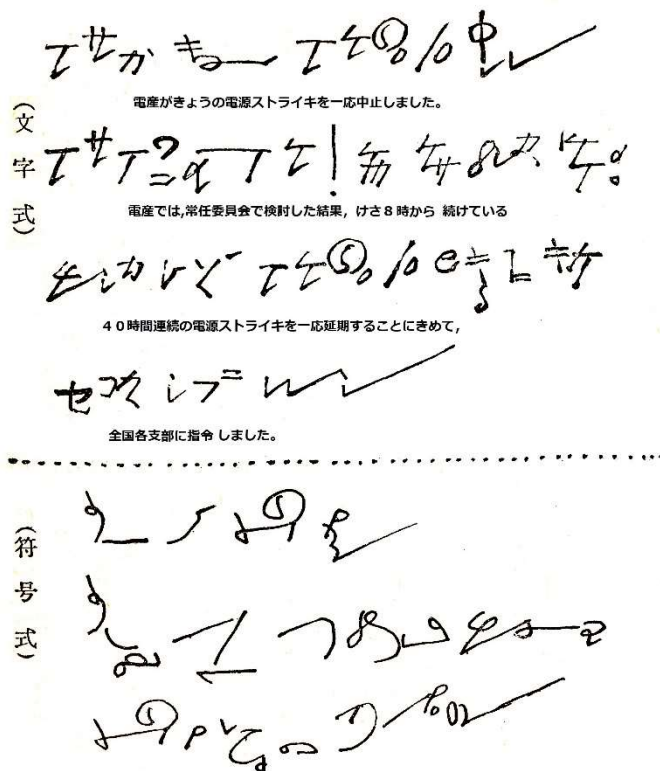


図2-114 西来路秀男による標準式速記文例（上がカナ式，下が符号式）
 「速記入門ハンドブック」1955.11.15 西来路秀男 衆議院式単画符号完成者

	アイウエオ	カキクケコ	サシスセソ	タチツテト		
衆議院式 26期1942	ゝ ー ー ー ー ー	ー ー ー ー ー	ー ー ー ー ー	ー ー ー ー ー		
文字式速 記法 1955 西来路秀男	アイウエオ	カキクケコ	サシスセソ	タチツテト		
	ナニヌネノ	ハヒフヘホ	マミムメモ	ヤユヨ	ラリルレロ	ワ
衆議院式	ー ー ー ー ー	ー ー ー ー ー	ー ー ー ー ー	ー ー ー ー ー	ー ー ー ー ー	ー
文字式	ナニヌネノ	ハヒフヘホ	マミムメモ	ヤユヨ	ラリルレロ	ワ

図 2-115 西来路秀男による単画標準符号とカナ速記の素音符号

11. 簡易速記法

文字を母体にした基礎符号を用いる方式としてカナモジカイは片仮名、ローマ字会はローマ字、さらに平仮名を速記符号材料とする平仮名方式の三様の提案が日本語で行われた。その中で、平仮名と片仮名を用いる発案が中根正雄によって1958年8月12日生まれた。京都府警察本部から速記講習会の出講依頼を受けた際、中根は警察用語を符号式でなく、警官が日常簡単に使える方法を創案しようと研究した結果、仏教界で昔から書かれてきた略字のような速記法を考案したと「中根正雄自叙伝」(2003年)に書いている。そのアイデアは画数が非常に多い「窃盗逮捕」を例にして説明され、ポイントは平仮名と片仮名を読み分けするということであった。図2-116は簡易速記法考案のヒント。



図 2-116 カタカナひらがな使用の簡易速記法のヒント 中根正雄 1958

あ列短音	い列長音	う列長音	え列長音	お列長音
		う:ウウ		お:オウ
か:キャ	き:キュウ	く:クウ	け:キョウ	こ:コウ
さ:シャ	し:シュウ	す:スウ	せ:ショウ	そ:ソウ
た:チャ	ち:チュウ	つ:ツウ	て:チョウ	と:トウ
な:ニャ	に:ニュウ	ぬ:ヌウ	ね:ニョウ	の:ノウ
は:ヒャ	ひ:ヒュウ	ふ:フウ	へ:ヒョウ	ほ:ホウ
ま:ミャ	み:ミユウ	む:ムウ	め:ミョウ	も:モウ
		ゆ:ユウ		よ:ヨウ
ら:リャ	り:リュウ	る:ルウ	れ:リョウ	ろ:ロウ

イ列符号による拗短音表	き:キユ	し:シユ	ち:チュ	に:ニユ
	ひ:ヒユ	み:ミユ	り:リユ	
エ列符号による拗短音表	け:キョ	せ:ショ	て:チョ	ね:ニョ
	へ:ヒョ	め:ミョ	れ:リョ	

簡易速記法の筆記例

ホ^ク:ホケン保険 キ^ン:キケン危険 キ^ネ:キネン記念 キ^ネピ^ニ:キネンピ記念日

こ^ム:コウムイン公務員 い^レ:イリョウ医療 ご^ル:ゴール よ^サ:ヨリソ予算 ゆ^ビ:ユウビン郵便

ワ^シ:ワシントン と^ザヨ^キ:トウザヨキン当座預金 シ^ホ:シホン資本 シ^ホト^キ:シホンキン 資本金

図 2-117 簡易速記法の表記法体系 中根正雄 1958

「簡易速記法」の音の表記法は図 2-117 に示されているようなもので、片仮名は単音節、平仮名は拗音、長音を示す分担である。したがって「交通」は[こつ]と書くこととした。用法は図 2-117「簡易速記法の筆記例」にあるように、文字のサイズを大小 2 種、小さな文字を書く場所を 2 種に分けて異なる音をあらわすことになっている。

警察官が職務上、聞き取り調書を作成するための早書き法として教育されたほか、1958 年から自衛隊でも講習が各地で行われて、隊内部の伝言板「口達会報」(図 2-118)にも情報が簡易速記法で書かれることもあった。簡易速記法の講習を受けていない者、外部の者には暗号のようなものなので読めないが、書き込み、読み取り能率がよいため、情報交換の能率が上がった。

なお、警察官を対象とした速記書として「警察叢書第十四輯速記法」1932. 7. 5 奈良県警察部は、グレッグ式の楕円を幾何的に分解して単画符号を設定した方式があったとするが、著者不明、方式系統不詳。

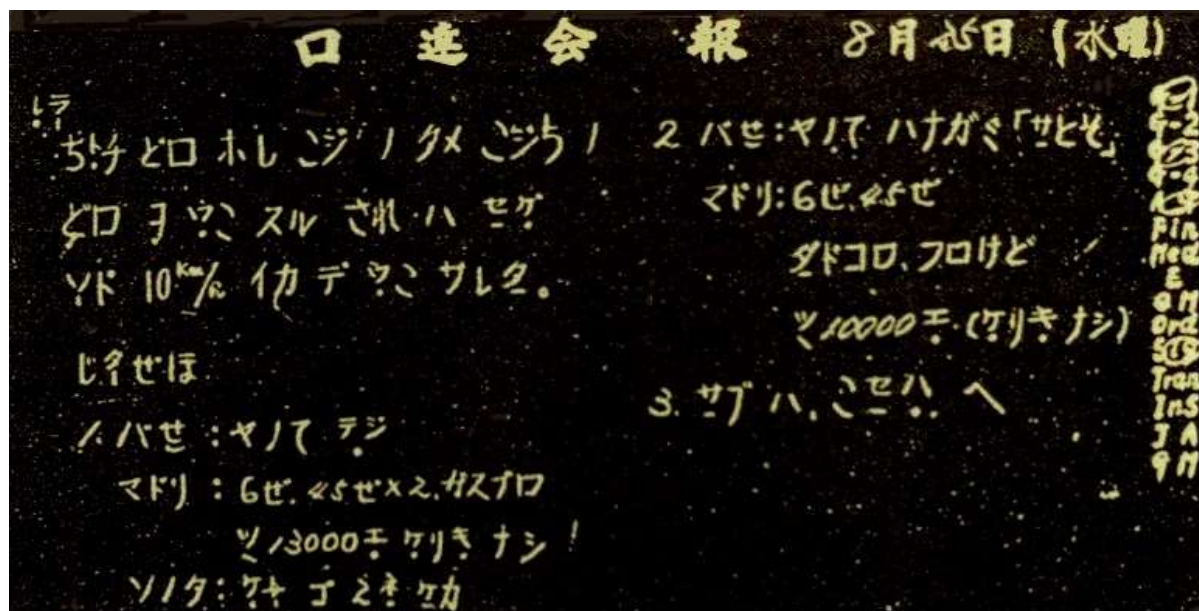


図 2-118 自衛隊の「口達会報」

中根は最初、「即席速記法」と命名したが、最終的には「スピードメモ法」と改めている。その原則は、左起右進横書きで文字を表音的に、可能な限り続け書きするものとなっている。

片仮名は短い音、平仮名は長音をあらわすだけでなく、言葉の最初の音だけを書いて略字とする中根式速記法の符号理論を適用している。また、文字の大きさを大小 2 種に書き分け、肩の位置、脚の位置に書いて、鼻音(ン)、促音を表す符省法として採用した。中根式速記法のインツクキ法を導入してツキイチクン法を制定した。略字としてはよく使われる言葉を最初の仮名だけを書いて表す頭音摘記法を組み込んでいる。